

## 第6回 奈良県立高等学校入学者選抜検討委員会 議事要録

1 日時 令和4年12月27日(火)14時～16時

2 場所 奈良県庁 東棟2階 教育委員室

3 出席者(敬称略)

京都大学特任教授	小松 郁夫
奈良教育大学教授	赤沢 早人
県議会文教くらし委員会委員長	田尻 匠
県都市教育長協議会会長	上田 陽一
県町村教育長会顧問	小谷 隆男
児童生徒保護者代表	工藤 将之
県高等学校長協会会長	栢木 正樹
県中学校長会会長	熨斗 慎司
県小学校長会会長	鍵本 光弘

県教育委員会教育長 吉田 育弘  
他、県教育委員会事務局職員 6名

4 概要

(1)開会

・今日最後の検討委員会ということになった。さまざまなご意見をいただきながら、我々として今後入試改革について、来年度入学生徒が3年生になったときにこの入試を適用しようと考えている。一番急を要するのが調査書の取扱いをどうするのかということである。

・主体的に学習に取り組む態度、これは新しく1つの評価の観点として文部科学省が位置付けたものだが、これを入試の中で具体的に点数化できないか。忌憚のないご意見をいただきたい。

(2)協議

○事務局より<資料に基づき説明>

○委員より<主な意見>

・学習指導要領が変わったというところで1年生からも成績を入れていくというのはいい案だと思う。

・中学校の成績の取扱いと中1ギャップが直接つながっているとは考えにくいところである。

・情報を知っていれば親も身構え、それなりの対応ができる。善し悪しはわからないが、周知徹底ができる体制があれば、それは問題ないと思う。

・1、2年生は主体的に学習に取り組む態度を調査書の点数にするということについては、

非常にメッセージ性は高いと思う。1、2年生の主体的に学習に取り組む態度の、何ををもってAとするか、Bとするか、特に主体的に学習に取り組む態度は、そのこの部分の振れ幅が大きいように思うので、中学校間の合意というのが前提にあれば、1つの方向性であると思う。

・主体的に学習に取り組む態度はあまり大きな差がつかないだろうと想像するところである。

・新しい学習指導要領が少しずつ浸透してきて、調査書の扱いで1年生の主体的に学習に取り組む態度が入るとすれば、もっと進むと期待する。メッセージ性は高い。評価は指導と一体といったところで、中学校間のすりあわせは必要なのかという点には少し疑問がある。それぞれの指導者が、自分が指導したことに対して決まってくるものだと思うので、観点をそろえる必要があるのだろうか。指導者は、もしこれが入ってきたら文章化する必要があると考える。評価に対する先生たちの見方が変わっていくきっかけになると思うので、大賛成。1年生の成績が入ることについても賛成である。

・1年生の成績が入ることについては賛成である。公平性については、各学校や先生によってかなり違うように思うので、評価の基準は何かの形で決めなければならないのではないかと考える。それと同時に、評価をする教師の精神的、時間的なプレッシャーがあるのでは。生徒の将来を決める評価となり責任があまりにも大きいと思うので、教育委員会としてどのようにするのか決めていく必要があるのではないか。

・主体的に学習に取り組む態度は、単独で評価するものではなく、身に付けた知識・技能をいかに思考・判断・表現した結果を生活に生かしたり、社会に生かしたりするステップであるので、そういう意味で言うと、知識・技能が一定以上身につけて、思考力・判断力・表現力が発揮されている状況でないと主体的に学習に取り組む態度は高い結果にはならないことになる。どうしても入試に使うとなるとインフレを起こす可能性がある。そうなると思えば思考力・判断力・表現力もAでないとだめ、となり全体的に上がっていくこととなることは懸念されることである。結果としてほとんど差がつかないとなると、中学校から成績を出してもらおうというそのもの、選抜をする意義がどんどん薄まるのでは。主体的に学習に取り組む態度を成績として運用して使うということはメッセージ性が高いので、いろんな条件を整えたうえで検討していただいていると思うが、ひととおりできていればB、Aを付けるということはある意味よほど優れた成果をあげたという意味なので、Aを付けるときには、どういう意味でAなのか、所見を先生に書いてもらうぐらいの手続きが必要であるようにも思う。

・Aを付けた場合に理由、Cを付けた場合に理由と、これを調査書で付けるとなると、すごい仕事量にもなり、他校との比較につながる。おそらくインフレが起こると思われる。

・他府県の調査書のように、15%は学力重視、15%は調査書重視になれば、そこに我々がきちっと頭を整理できるかということ。本人も読み込んで、自分はどれにあたるか考えていく力も身に付けていかねばならないと思うし、事前に教師も知っておかなければならない。

・一律に子どもたちを並べて当てはまる学校に行くというのは望ましいと思わない。この科目が得意なのでこの方面に進むということが望ましいが、あまりに複雑になると全員に周知ができるか不安を感じる。

・高校でアドミッション・ポリシーを作成すると言われていたところからすると、アドミッション・ポリシーを踏まえた選抜方法というのは、シンプルな方がいいのではないかと考える。1つの学校の中で、学科が複数あれば別だと思うが、普通科のみ、農業科のみという学校であれば、基本的に選抜方法はあまり複雑化すると誰も把握できないということになると思う。原則で言うと、取り方が違うということは目指す生徒像が違うということで、入学したときのカリキュラムも違うということになるはずである。入った生徒に合わせてカリキュラムを構成する必要があるので、それが高校にできる体力があり、やるんだということであれば問題はないと思うが、入り口が違って中身が一緒と言うことは、煩雑化を招くだけかと思う。教育課程の特色を考える場合、どういう生徒をとるのかという特色、裁量は可能な限り学校に委ねるほうがいいと思うが、校内でいくつかにするとややこしくなるのでは。

・奈良県では生徒は行きたい学校より、行ける学校になっているように考える。県外に行こうか、私学に行こうかという選択肢になっているように思う。奈良県の中で行きたい学校をたくさん作ってほしい。

・国からは、ポリシーで限定することのないように、生徒の受け入れる幅を狭くすることのないようにとある。学校の特徴をどのように出すか、これは難しい。ただ、そのような募集人員の15%については調査書の点数の高い生徒とするといった入試ができるのであれば、各校でももう少しできるのではと思う。

・PTAとしても一律に子どもたちを並べて当てはまる学校に行くというのは望ましいと思わない。ある子は、この科目が得意なのでこの方面に進むということが望ましいので、一律の入試ではないほうがいいと思うが、あまりに複雑になると、先生はすごくたくさんいらっしゃるので、全員に周知ができるか。そこに関する不安を感じる。

・特色選抜と一般選抜の一本化の話だが、保護者からすると機会が失われると思われる方もいらっしゃると思う。事前にある程度の情報が見えているというのは助かると思われると思うので、志望状況調査の実施については、ぜひとも奈良もやっていただくと助かる。

・行きたい学校ということであればそれぞれ自分で責任をもつ。倍率が高い、入る前にシャットアウトされてしまうということもあり、データの見方だと思う。動向が見たいということであれば教育委員会主体で行う。時期は難しいと思うが。

・どのタイミングで実施されるかということにもよると思うが、生徒たちの蓋をあけるまで分からないということに比べると、少し心理的なハードルが下がると思う。

・生徒、保護者にとって、大変貴重なデータになる。使い方によっては宝になる。後は、教育委員会や学校の導入への進め方として生徒に真剣に記入してもらい、一度でなく二度実施する。やり方は相談しながら実施する方向がよい。有効性をもたなければ、いい加減ならばやめた方がよいとなるので、高い意識をもっていただき、研究をしている民間もあるので調べてみることも大事である。

#### ○委員長まとめ

・調査書成績の取扱いを1年生から対象とするということについては、あまりご異議がないようである。問題は、観点。新しい学習指導要領が目指す主体的な学び、学びに向かう力・人間力等、学びにおいて主体性が非常に大事であるという点についてはあまり異議が

ないと思うが、問題はそれを評価する先生や学校によって公平性や客観性が保てるのか、また学校間で差が出てくるのではないか、というご意見のようだ。まずは、評価の観点を教師があらかじめ確認しておく。教師が自分の担当分野に関して、どういう目当てでどういう資質・能力を育てようとしているのか、あらかじめ子どもたちにしっかり伝えておいてそれを軸にしてぶれないようにするということがまずは第一だと。そのうえで、学校の責任者として校長が最終的に学校としての統一した評価規準、評価の在り方を、プロセスとして大事に置くべきだと考える。

・奈良県の新しい学習指導要領が目指すものを、県としても踏まえていく。それを高校の評価に入れていくというある種のメッセージ性をしっかりと出していき、そのうえで、子どもたちがそのように育っているかできるだけ丁寧に見取ってバックデータを豊富にし、持続的に評価の在り方について研修を重ねていただくということでどうか。学習指導要領も目指しているし、奈良県としても主体的に向かっていく子どもたちを大事にしたいというまさにメッセージをこの中に込める。

・学校の裁量は、一般的に言えば大変結構なことである。それを入試に手法としてどうするかという問題だが、それぞれベクトルの組合せだと思う。子どもの立場にたてば、自分は将来こういうことをしたいのでこういう高校を選ぶとなり、受け入れる高校側とすれば、できるだけ自分の学校の様々なポリシーに合った生徒を選抜できるようにする。ただ、あまり複雑化すると、それに対応したカリキュラムというのは非現実的であると考え。県立高校としては教育委員会として大枠を作った上で、校長先生を中心として各学校のポリシーを明確にし、それをきちっと中学校、生徒や保護者に、混乱させない程度の多様性でやっていくというのが現実的ではないかと思う。

・教育行政がエビデンスベースとなっていくことは非常に大事なことで、お金のかかる部分でもあると思うが、その辺も含めて県民の皆さんに理解をいただいて、奈良県の先生たちが日頃頑張っていることを広報されるのが大事である。奈良県の県立高校に入れようと選んでもらえることも含めて大事なことだと考える。

### (3)閉会

#### ○事務局より

・今後について事務連絡